

分科会 4 「安全衛生」

・セッション 1

「現場での活動と安全衛生」

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

分科会4のファシリテーターをつとめます千葉レスキューサポートバイクの藤田と申します。よろしくお願いします。

所属とお名前を順番にあいさつをしてもらえればと思います。今日は、この分科会に傍聴者の方2名参加していただいております。検討会に、傍聴者の方からも意見をもらえればと思っているのですが、その辺の了解をいただければと思います。では、岡野谷さんから順番に。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

数年前に「安全衛生」についてぜひ分科会で討議したいとご提案をいたしまして、すでに何回か継続討議させて戴いてきています。今日は、司会を藤田さんをお願いして、私は語り部として、少し今までの整理も含めて話をさせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

蓮本（特定非営利活動法人 災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

私も、長くこれを部会でやっていますので、逆に今日は参加されているほかの皆さんからの、もっとこうした方がいいんじゃないかという意見が聞けたらと思っています。

藤田（内閣府 政策統括官付参事官（災害予防担当）付主査）

安全衛生の方も、回を重ねましていろいろと蓄積されてきて、これからさらに次の段階へというところに来ておりますので、ぜひまた今日は勉強させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

渡邊（株式会社ダイナックス都市環境研究所研究員）

もともと市町村の防災担当を4年間していましたので、こういった分野も少し興味があります。お聞きしたいことがあったら、口を挟んでしまうかもしれないですけども、どうぞよろしくお願いいたします。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

緊急救援の担当になりまして、まだ3カ月目でして、何も分からないのですが、今月中旬までミャンマーの方に出張へ行っておりまして、安全衛生に関して本当に興味を持っておりまして、今日は勉強させていただきます。よろしくお願いします。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

いろんなご縁から、安全衛生の部会の方に顔を出させていただいております。まだこれで2回目、3回目くらいのお話でして、検討会の方にも初めての参加ということで、ちょっと前後の様子があまりよく分かっていない中なのですが、私自身としては、うちの推進委員会が養成しております、セーフティリーダーの、通称SLと呼んでいるメンバーたちが活動しておりますので、その方々のやはり安全衛生ということに対して、かなり興味を持っていますので、勉強させていただければと思っています。よろしく願いいたします。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

まず、資料の説明を岡野谷さん、宜しくお願いします。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それでは、お手元に今お配りしました資料を説明します。一番上にある「目からウロコの安全衛生プチガイド」は、検討会本体、ならびにこの安全衛生研部会で検討した内容の成果物です。災害ボランティア活動においては、安全衛生ということには中々目が向きづらいので、それをいかに啓発するか、ボランティアに安全について簡単に目を向けてもらうかを検討しました。広めるには、マニュアルでは駄目だ、ガイドラインでは駄目だ、というのが結論です。そんなものは誰もボランティアの現場では見ません。では、どんな物を提供したらいいのか。いかに分かりやすく、手に取って見られるか、しかも暇な時間にも見てもらえるもの、という点をポイントとして作ったガイドです。何回かの災害時、実際に災害地に持って行って、ボランティアやコーディネーターの皆さんに見てもらって、使って戴き、そのご意見を聞きながら改編をしてきて、今、一応これがバージョン1.1となっています。

災害の現場には日本語ができるボランティアだけではない、という観点からガイドの外国語版も作成する方向でいます。現在、英語バージョンは完成し、配布もしています。ハングル版も作ろうかという話があったのですが、翻訳が進んでいません。また韓国では、災害地における作業者のほとんどがボランティアではなく、軍隊であること。オイル処理の際にも彼らが前線に立って回収作業などを行っているということで、現地の方から「こんなものは当たり前で実行されている」という非常に素晴らしい発言をいただいた経緯もありまして、作成を中断。現在は英語版のみにとどまっています。ただ、今後、大きな震災があったときのためには、本当にいろいろな言語でこれを作って、被災地の中に入って活動してくれる各国の人たちにも使っていただきたいですね。ですから、やはりこのガイドのドラフトを決定版にして、英語版、日本語版、スペイン語版、さまざまなものを作っていくなどとは思っています。という資料です。

それからA4判の資料ですが、これは本検討会や安全衛生部会とは切り離れた、ボランティアの安全衛生研究会グループとして、厚生労働科学研究の補助金を戴いて研究をしてきた成果物です。過去2年間、ボランティアの安全や衛生に関して研究や実地調査をし、その成果を報告しています。全部で5種類あります。これらの成果は検討会や分科会にもフィードバックしており、分科会で更に討議した内容、またその成果物を、ヒント集などの形にしてで発表するあたりは検討会にサポートをしてもらっていま

すが、

一番上にあります「地域における健康危機管理におけるボランティア等による支援体制に関する研究」は、厚生科学研究の主任研究者、研究代表者が書いているものです。その中に、われわれの安全衛生についても必要であり、研究を進めるということが述べられており、表紙のようなものです。

実際にご提示すべきは二つ目の資料です。「災害ボランティアの安全衛生、ボランティア向け教育教材の開発」というのが、昨年のテーマでした。報告書には目的や背景、研究方法、そして結果のまとめが載っています。更に、別紙で2冊、安全衛生、それから教育教材の開発について添付しています。これらは、研究の方法論、実際のデータ、ならびに、その考察などが載せてあります。どちらの研究にも、この分科会に出席していらっしゃるメンバーはほとんど参加しておりますので、検討会に報告すべき今年度の最終的な報告にもなっているということでご提示しております。

最後は、「ゲーミングシミュレーションを利用した啓発ツールの開発」というもので、これは安全衛生研究会自体が科研として研究しているのではなく、堀口さんという先生が研究しているテーマです。研究協力者という立場ではありますが、殆どの研究とツールづくりは我々が実践し構築しているので、この場にご提示しました。テーマは災害ボランティアに関するクロスロードゲームづくりです。2年がかかりでツールを開発してきました。

最後の紙が、今申し上げましたクロスロード災害ボランティア編の、現時点で最終原稿になりつつある実物案です。これもまだまだ最終案になっておらず、もう少し追加して決定をしていきたいということで、今日、もし時間があればここら辺のところまでの討議もしたいなと思っています。以上、資料の説明です。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

はい、ありがとうございます。資料6の中に、各分科会での共通論点についてというのがあります。最終的にはそこに持ってこなければいけないというのが。資料5の16です。

取りあえず安全衛生ということで、一応最初に3分割くらいに分けて、いろんな論点が今まで出てきていたと思うのですが、一番最初に多分安全衛生が出てきて問題になったのが現場の話。現場で何があったのかとか、そういう形ですね。もう一つが、ボランティアセンター、ボランティアを扱う側の方での問題点というか、論点があって、三つ目が、人材育成とか、そういう教育の部分ですね。

ちょうど、今日も4分科会の中に入っている中でも、人材育成というのは分科会2でもやっているの、そういう横のつながりみたいな共通認識の方を、最後、発表のときに、くし刺しではないですが、人材育成をやっていたいている方たちにも、そういう話ができればなと思っています。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

共通認識のところですが、「分科会にも関係する事項である災害ボランティアセンターにかかわる内容についても取り扱っていただくことにいたしました」と書かれているですけど、災害ボランティアセ

ンターに関わるというのは、具体的な提案でも良く、そういう目線に立っての討論というのでもいいわけですね。今までは、われわれが何をしていくか、どういうふうを実施するのか、足りないものはいいのか、ニーズは何かという話をして来ましたが、一歩進んで、具体的に災害ボランティアセンターが立ち上がるに当たってわれわれは何を提案したらいいのか、現実にもうまくやるためには何が必要なのかという議論に持っていった方がいいんじゃないかな。せっかくこれだけコアなメンバーがいるので。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

例えば、今まで柏崎の方へ話を聞きにみんなで行ったときに、ボランティアセンターの方としては、最初はそこまで頭が回らなかったとか、そういうような話が出ている中で、では、そういう活動をどう担保していくとか、バックアップすればいいのかとか、誰が行けばいいというだけの話になるかもしれないんですけど。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

でも、全部の被災地に「知っている誰か」が行ってたら大変。最初からノウハウをちょっとでも知っていたらスムーズに進められた、そこを知っておけば良かった、という知恵があるかもしれない。それをまとめて提示できることが大切では？。例えば薄木さんに伺いたいのですが、ミャンマーに2週間行ってみて、その中で、例えば1週間して振り返り向いてみて、「ああ、こんなこと、もっと早くに気付いていれば安全だったな」と思われたことが多分あったかのではないのでしょうか。そういう点を教えていただけるといいと思うんですが。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

特に、最初に行った現場で活動する安全性という、薄木さんの方が、実際に現場で活動されている中の参考の意見を聞かせてもらえればと思うし、例えば、人材育成で言えば、天寺さんの団体みたいに人材育成しているようなところで、いろんな紹介してもらえれば、安全衛生に関して何か教材じゃないんですけど、そういうのがあれば、どういうところをしなければいけないのかというのが、逆に分からないところもあるのかなというのがあって、そういう形で、三つごちゃごちゃに動くとは僕は頭がパンクするんで、取りあえず現場の話から。

岡野谷さんは多分、阪神・淡路大震災のときとかで、具合悪そうな人たちとか対応されていたと思うんですけど、例えば、来る人に対して何が必要かと言われても困っちゃいますもんね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

そもそも災害ボランティアの話をするときに、前提として日本のボランティア活動自体が未熟なところがあって、安全衛生というのは、そもそも普段の活動の中でも考えられてないものの一つですね。だから、災害時のボランティア活動についての安全がどうこうという前に、そもそもボランティアに対する安全教育、あるいは、コーディネーターもそうだし、ボランティアをお願いする側にしてもそうだけど、日常のボランティア活動における安全教育ができていないという環境がある。災害時になると、さらにリスクの高い活動が生じてくる。あるいは、海外のボランティア。この間、亡くなった方もいら

っしゃいますが、あれも、そもそもリスクがどの程度ちゃんと評価されていたのか、対応策を取っていたのか。そういうことがあるので、まず災害ボランティアというよりも、普段のボランティアの中にももっと安全教育を入れていく、ということが、まず第一になってくる。その上でということじゃないのかなと。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それを一緒にできていけば非常にいいことだと思います。もちろん通常のボランティア活動にだって非常に危険が伴うということは重々分かっている。ただし、通常のボランティアの場合は、予防対策ができるわけですね。本来であれば、活動をする前にどんなことが起こるかが大枠分かっている、それを踏まえたうえで活動するわけですから。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

例えば、この「目からウロコの安全衛生プチガイド」にしても、「さあ、やるぞ！」と自分の体調や今日の活動内容を確認して、では、誰が担当でとか、服装がどうだこうだって、別に災害でなくても本来そういうものなのです。でも、ボランティアに行くってもう決めてたからって、体調悪いのを押してきたりとか、野外での活動なのに何の備えもしてきてないで、半袖半ズボンとか、ヒールで来る女性の方も、別に災害でなくてもいるし。まずそういう部分、それプラス、災害時ならではのという教育パッケージというのは、平時のボランティア活動に対する心得などはいろいろあるのだろうけど、安全衛生に関しては一つの教材、教育ツールなり、パッケージを作っていってもいいんじゃないのかな。

実際に、それはいろんなところでもうノウハウがあるので、そういうのをボランティア用に整理をして、最低限こういうことは、平時から活動の中でもみんな気を付けましょうねという形でまとめたりアウトプットしたりしていった方が。「災害ボランティアの」というと、本当に見る人が限られる。ある意味、マニアックな話になるので、そうでないところから、あるいは、そうでない見せ方をしていった方が、普及や全体のレベルアップにはつながるんじゃないか。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

ほかのボランティアというのは、例えば、美化活動をやっていたりとか、そういう方々に対してということを含めてですね。それは、確かにあると思います。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

例えば、その美化活動では、この前、能登半島地震の2周年ということで、石川県が報告書を3月25日に公開しました。1周年のときに、輪島市がゴミの中でボランティアが活動している写真を使って、あまりそれが安全衛生上でよろしくないものであったということで議論があって、輪島の方も、もうそういうことはご存じなんだけれども、結局2年目になって、また、それも今度は、石川県が報告書を作るときになって、問題とされた同じ写真を使い回していて、「こんなにボランティアの方は頑張りました」って誇らしげに行っている。すごく安全衛生の面から指摘したいようなことがいっぱいある写真を使っている。平時の美化活動だけでなく、ほかの活動にも言えることなので、もっと日常から「知ってもら

うこと」が大事なのかな。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

新聞でも、水害のところで、中学生が裸足で短パン、体操服でやっているのがどんと出るんで。「地元の子供たちも頑張っています」という。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

感染リスクとか、どれだけ高くなっているか。でも、それは、そういうところには一切目が行かずに、というか、知らないから「頑張ってます」と。それこそ、泥だらけになって活動してる姿の方こそ尊いというのだろう。逆に、変にきちんと装備をしてやっていると、「何、ボランティアなのに」みたいな感じに思われるようなのが問題なのかな。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

新聞でもそうなんだけど、やっぱり災害ボランティアっていうのをすごい美化しすぎているみたいなのがあって、安全衛生、バイク隊でも出るわけですね。「バイクが活躍してまーす」とっていうと、次の週の土日にはバイクだけで60台、70台来るんですよ。しかも、活動に適さないバイクとか来ちゃうわけですね。そういうのを見ると、やっぱりどうなのかなという。本当にそのバイクで被災地走るんですかみたいなきっかけというか、そういうのは悪いことじゃないと思うんですけど。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

さっきボランティア活動は、ボランティアあって活動と言っていた方がいらしたけれど、災害地ではちょっと違うと思うのです。被災地あってのボランティア活動なんですよ。だから、もちろん自分たちの活動は確かに自主的な活動なんだけど、被災者が何を要求しているか、まずはニーズがあるのか、被災者のために自分たちが何を支援できるのかに沿うのであって、自分たちが何をやりたいかではないわけです。そこは、ボランティアの皆さんもやっぱり考えなきゃいけないと思う。

それは置いておいて、災害ボランティアに安全衛生を説くことは、私は本当に必要だと思うんですよ。日常のボランティア全体への安全衛生ガイドを作成することも大切なことであるし、それはそれとして並行してやっていかなきゃいけない。逆にこれはもう、今やっていない方がおかしいぐらいのレベルです。長い間継続してきている日々のボランティア活動ですから、そのリスクをしっかりマネジメントすることはやっていて当然。一方で、同じく当然やっていかなきゃいけないことなんですけど、それでは済まないのが災害時のボランティア活動だと思うんですよ。二次災害の危険はあるし、そもそも安全が確保された場所でやっているものではない。そうした危険が予期される場に特化した安全衛生のマニュアルやガイドが別に必要だと思うのです。日本国民の教育という意味では、もちろん蓮本さんのおっしゃっているように、もっともっと低いレベル、要するに、普段のおうちの中での安全衛生、そこから含めて全部ボランティア活動。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

最低限、どんなボランティアにも共通するものに災害時ならではの配慮を含めたツールとして、ここでは出していないかな。ただ、その共通になる部分なんていうのは、もうちょっと広く出さないといけない。あるいは、見せ方として、災害ボランティアのことを後ろに1章なり置いたような形でパッケージとしては。基本がないところにいくら説明しても一緒。それこそ、災害ボランティアコーディネーターの話でよく言っているが、ボランティアコーディネーションとか、コーディネーターとしての教育もなしに、災害ボランティアのコーディネーター養成講座といって、災害ボランティアセンターのルーティンワークだけ学んで「災害ボランティアのコーディネーターです」と言って来て実務に問題のある方がいる件と根は一緒。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ただ、全社協さん、例えば、ボランティアの窓口の社協さんだと、全社協の方では、普通の一般のボランティアに関しては、安全衛生に関するビデオを出していたりとかしているわけじゃないですか。QMSとか、福祉の関係の方では、そういうちゃんと安全衛生は出ています。でも、実際に災害の方に来ると何で飛んでいっちゃうのかなと。現場でも同じ担当者なのに。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

だから、ノウハウがないというのはやっぱり一番大きいと思う。災害時の活動には、通常の活動とは違うリスクがどの程度あるとか、それに対してどう対応をしていくかということが、被災地での経験が重ねられても、ちゃんとしたノウハウとして伝えられているわけではないので。成功体験しか基本的には語られない。あるいは、担当レベルでは「こういうことがあってね」と失敗が話されることがあっても、それは、「こうしておけばよかったな」という、要は一つのエピソードなので、それが整理をされないことには、やっぱりいざ災害が起こった現場では対応できない。だから、最初は「ヒヤリハット」みたいな形で整理していったというのが、一番取っ掛かりやすいのかもしれないですね。それをだんだん整理していった、きちんと事前にもうこういうことはやっていきましょうねというパッケージになっていけばいいんでしょうけれども。そういう意味では、もっとしっかりと「ヒヤリハット」をこれから集めてもいいかもしれないですね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

仰る通りと思います。確かやろうと言って検討会の席でも声を掛けた記憶があります。でも、全く返事がなかった。ヒヤリハットや失敗談は、やはり中々出したがらないというのも一つだろうし、メーリングリストに書いても個人が特定されてしまいますからね。だから、別の方法で本当に少し「ヒヤリハット」を取り出すというのは、大切だと思います。。

今、災害ボランティア活動とは全然違うのですが、リバーレスキューという川の安全を実行するグループにいますのですが、ここではかなり「ヒヤリハット」が出てくるんですよ。それは個人特化されない紙ベースの収集法なんです。そして面白いことに、「こんな地形の場所で誰々ちゃんが川に落ちちゃった」みたいなシートが一杯集まってくると、共通するところが出てくる。やはり最初から何か対策をしていかなきゃいけないという議論が出てくる。「ヒヤリハット」はうまく使えば非常に効果的なんだと思いま

すよ。そして、「ヒヤリハット」と思っているけど読んでみるとヒヤリハットどころではないものも、多分、いっぱいあったと思うんです。薄木さん、ちょっと何かご発言があればお願いできますか。「こういうことがあった」でもいいですし。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

そうですね。ミャンマーに行きまして、首都のヤンゴンから車で11時間ぐらいかかるホイトゥ村に行きまして、そこからまたボートで5時間ぐらいですね。医者も何もいないところでして、もう本当に病気になったらおしまいだなと思いましたね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

その場所を何で活動拠点として選んだのですか。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

そこが被災地です。サイクロンの被災地でして、1年前にサイクロンがありまして、そのときに被災地、一番被害が大きかったところですけど。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

被害が大きかった場所ってことで入ったのですね。それはシャンティとして選んだ場所なのでしょうが、被害が大きかった場所はヤンゴンにも一杯ありましたよね。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

そうですね。海側ですね、大体。被害が大きかった海側を選びまして、そこに行ったんですけど。そこで、本当に病院もないし、もし仮に病気になってしまったら、本当に迷惑ボランティアですよ。村人に世話を掛けてしまって。ヤンゴンに帰るのも、またボートを乗り継いで、車を乗り継いで帰って。今回は時間的に全ての予防接種を受けられなかったのですが、今回思ったのは、抗生物質を持っていくとか、何かしら方法はあると思うんで、これからはそういうふうにしていきたいなと思いました。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

その予防接種を受けなかったというのは、それでよかったのですか？そもそもミャンマーに行くって時点で、法律上受けなきゃいけない予防接種ってないのですか？破傷風とか。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

そうですね、受けなきゃいけないという強制的なものはないのですが、ミャンマーはマラリアとかは別として、入国に必要な強制的なものはないですね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

こうしたお話も非常にいい題材になります。日本の中で活動していたって破傷風がないとはいえないわけですからね。犬にかまれたと言って病院に来た人には、必ず破傷風のトキシイドを打ちます。途上国に行くなら誰でも打たなきゃいけない、予防するのが前提というふうに考えて、ボランティアに行くなら、予防接種をしていきましょうと明示することで、破傷風の被害もかなり減るんじゃないですかね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

けがをしたらでいいでしょう、破傷風ぐらいは。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

狂犬病だったら前もって打たなきゃいけないかもしれないけど、破傷風は。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

でも、ここの共通論点にあるのは、担保する仕組みってというのは、やっぱりちゃんとツールを作ることと、さまざまな場所でそういうのを伝えていく。一般の方にも伝えなきゃいけないけど、まずはそれをコーディネーションしたり、ボランティアを募集したりするような団体に対しては、最低限担保しておきましょうねというようなものは、やらないと。もちろんきちんとやっている団体もたくさんあるけど、外向けに「いろんなところでやりましょうよ」とか言っていけないといけないし、言うていくためには、そういうツールも必要だし。そういう意味で、「災害の中で気が付いたんだけど、やっぱり一般のやつももっとやっていきましょうよ」という言い方なら、ここが言い出しっぺでも問題ないんだし。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

そうですね。講演会でも「通常のボランティア活動では、安全衛生なんて、皆さん当然やっていらっしゃると思いますけど・・・」と、つい言っちゃうんですけど、実はあまり安全管理などしていないだよ。あとで「いや、実はやってないんですよ」という返事はたくさん返ってきますから。だからこそ、やはりしっかり見直していかなきゃいけないなと思います。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

あと、どこまでをリスクとして考えて対応するかというのは、やっぱりかなり差がある。どちらかというと、属人的な、それぞれ担当している人の経験で量られちゃっているところがある。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

そうですね。例えば「美化活動は、全然普通のところでやってますから大丈夫ですよ」と仰る方たちがバイパス道路の真ん中で作業していることもあります。全然普通じゃないでしょう。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

美化活動にも幅があるからね。「道のゴミを拾いましょう」なら、多分「車に気を付けようね」ぐらいの話で、そんなにリスクはないとは思いますが。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

逆に言うと、自分みたいに仕事として工事とかに携わっていると、みんなアウトになるわけですね。ボランティア活動を見て。それこそノーヘルで重機に乗っていると、見ると、その場で止めたいということはある中で、そうしたときに、じゃあ、ボランティアだったらどこまで許されるのかという判断も、逆に難しい。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

だから、ボランティアとして自分で何かやっている分に関して考えるとしたら、要は、人に迷惑を掛けない。それは対象者であったり、あるいは一緒に活動している人たちであったり、あるいは個々のチームだったり、グループの仲間でないにしても、その被災地でやっている活動全体に与える影響であるとか。あるいは、身内のことであったりとか。もろもろの人に迷惑を掛けないというレベルであって、ヘルメットをかぶる、かぶらないとか、何かを規定するものではないのかもしれないけれど、活動をお願いする、コーディネーションをお願いする場合もあれば、地元で被災した人からお願いする場合とか、お願い元の相手はいろいろあるかもしれないけれども、そういう人に迷惑をかけないレベルにはやっぱりしておかないといけない。迷惑を掛けないということになっちゃうんだけど、センターであればコーディネートするときに、その人のリスク管理もそうなのだけれど、他の活動に影響を与えないようなリスク管理としての安全衛生。地元の人たちにしてみれば、来てもらった人がけがをして地元が非難されたり、後から活動に来る人が減ったり、来なくなったりというようなリスクを冒さないようにとか。多少、安全衛生の管理の仕方も、立場によっては違ってくるのかな。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

工事の現場というのは、もし事故が起きたときに最低限言い訳できる状況。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

ここは、言い訳できる状況でなくてもいいんだけど。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

最低限の担保ですね。労働安全衛生で決まっている最小限の。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

大体ボランティアも同じで、自発的にここがやりたいという気持ちを十全に生かせるようにするにしても、けがなく無事帰ってもらいたいし、もらわなきゃいけないんだけど。だからといって1から10までルールにしましてもね。例えば、4時にセンターに帰って来るというルールにしても、もともとは日帰りの時間とか体力的なこととか、さまざまな理由からやってみた事例だけど、あれが絶対のルールみたいになってしまっているところもあるんで、そうならないようなものを作らなきゃいけない。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

だから「こういう作業にはこんな格好をするといいよ」というサジェスチョンレベルがいいわけです。災害ごみを片付けるときには、ヘルメットをかぶりゴーグルをし、革の手袋をしよう！。たったそれくらいのスタイルであっても、口では言っても現実にはできないことがたくさんあります。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

だから、なぜっていう部分は、もう少し強調した方がいいと思う。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

あまり現場を経験してない人が、じゃあなぜしなきゃいけないのかっていうのは、多分知らないと思うんですよ。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

逆に言えば、こういうスタイルでしようというよりも、要はこういうリスクがありますよ。そうすると、それこそ自分の影響もそうだけでも、人にもこういう迷惑を掛けますよ。ということがあった上で、どんな格好がいいんでしょうねというふうに考えてもらう。その中の例として、「じゃあ、肌の露出を少なくするように長袖」などというようなことが、その後にある。安全衛生に関しては、やっぱりなぜという部分を強く打ち出すことが、ほかのものよりも必要なのではないのでしょうか。そうすれば、どっかへ行くときに、「このスタイルまずいかな」とか、「重機に乗るときにヘルメットをかぶんなきゃな」とかという自覚も生まれてくる。かぶりましようとか、長袖着ましようとかだけ教えられても、着なきゃいけないんですって言われても、なぜっていうリスクが分からないと。もしもそうしなくて事故が起こったときに、どういう影響を周りに及ぼすかというのが分からないと、あんまり意味がない。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ヘルメットをかぶろうが、長袖を着ようが、安全靴を履こうが、自分で危機意識を持ってもらわないと、理由なしでそれをしているだけでは裸でいるのと一緒なので。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

着てりゃ安全だということとは違う。リスク管理。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ある程度、ヘルメットをかぶらないと危ないというより、ヘルメットをかぶんなきゃいけないような場所なんだよというような意識を。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

これがリスクだということを分かってもらわないと、結局、安全にはつながらない。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ヘルメットかぶってれば安全だ、というわけではないということですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

重機で一生懸命土砂どかしている現場で、「ヘルメットをかぶっているから安全」と言って、崩れそうな土山の上にいたら、そもそも意味ないし。それこそショベルの操作範囲の半径の中でばおっと突っ立っていたらヘルメットがあろうが何しようが、いずれバケットで殴られますからね。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

現場へ行く災害ボランティアの方には、なぜというものの強調、蓮本さんが言われているように、なぜを強調するのと、なぜかの次は危機意識を持ってもらうのが必要なのかなと。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

基本、みんな、わが身は大事なはずなので。これがリスクなんだということが言われていけば、だんだんそれなりに自分で考えるとは思うのでね。

渡邊（株式会社ダイナックス都市環境研究所研究員）

ちょっと口を挟んでしまってあれなんですけど、そのリスクを一般の人に伝えるときに、さっき聞いていて面白いなと思ったのは、中学生の子たちが災害現場で、半ズボンでやっていると。それは一般の人が見れば素晴らしいですけど、実はそこにリスクがすごい隠れているということを、多分、専門家の方が言っていくとか、写真で見せながら、ここが危ない、ここが危ないということを言っていくと、ころっと変わるかなという気はしました。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

なかなかころっとは変わってくれていないですね。今の二つの写真は、もうすでに講演会などでも使っているんですよ。質問は「この写真、どこが素敵？」から始めます。「素晴らしいのはなぜ？」ってちゃんと聞くんですよ。その後、「じゃあ、どこが危険かな」と聞いていきます。でも、結構危険な部分は

分からないのですよ。指摘すると「ああ、」と。気づけば納得できるのですけどね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

そういう意味では、普及していく順番もある。コーディネーターとか、マスコミの人とか、実際に活動している人や見ている人に伝える人達に、まず普及。いきなり「さあみんなに」とやっても、なかなか難しいし、現実的ではない。キャンペーンを打つにしても、マスコミとか、それぞれの実際にコーディネーションなり、派遣する団体なりの人への教育から始め、それから「みんな、キャンペーン打ってね」というものだと思います。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

同じ中学生とかが、例えば、作業している写真で、これが素晴らしいとうたえば、それが素晴らしいになっちゃうし、中学生が危険な作業をしているという見出しを書けば、という。同じ写真でも、記者さんが書く見出し一つによって、写真の見方が180度変わってしまう。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

地元の支局の記者さんになると、説明すれば結構その辺丁寧に押さえてくれるんだけど、取材され尽くしちゃった後、何か使えるネタとか、いい場所を取れる記事を探しに来る方は詳しい知識のないままに、そういう一見感動的に見えるようなところを「こんなにすごいんです」と記事にすることがあるんでね。その辺の教育はなかなか難しい。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

現場はそんなにいいのかな。キーワードとしては、本当に、一人一人になぜっていうものを理解してもらえるようなツールを作っていくというところでいいのかな。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

多分、日本人が好きなんですよ、そういう話がね。「頑張ってます」というのが。論点的にはなんで、さっきの話に少し戻ると、論点というか、なぜになると、とにかくみんなそういうものを考えてこないからっていうのがあるし、KYという危険予知とかもほとんどない状態で来る。それは、危険性を自分が感じていないから、多分、普段の生活から。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

空気読まないKYは困るけど、危険予知のKYは必要だよな。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ということは、やっぱりそういう中で、ツールの内容にしても、なぜというのと、危機意識を持たせ

るような内容のものが必要になるのではないかと。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

そういう意味では、さっき出た「ヒヤリハット」をここの活動として集めましょうというのでもいいかもしれない。そして、整理をしていく中で「こういうリスクがあり得る」、「あるんだよ」と。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

だから、柏崎、新潟県中越沖地震のときには、もうだいたいその辺は、例えば、こういう怪我があったんで何々をどうしようっていうのは、毎日のミーティングで出ていたでしょう。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

「ヒヤリハット」じゃなくて、本当の事故についても伝えるのが重要。例えば、土のう袋にガラスを入れちゃいけない。ガラスを入れて持ち上げて、自分のももにおいてトントンしちゃいけないって。それで大腿部をザックリケガする事故がいくらでもあったのに、別の土地では同じことが何度も起こっている。昨日もテレビでプロからそんな発言がありました。「土のう袋は非常に堅いですから、もしそういう、がれきとか、ガラスとかがあったら、入れていただいて」みたいな。おいおい、土のう袋は堅いかもしれないが簡単にガラスが突き抜けるんだよ。とテレビに向かって言っていました。

まだそういうことをプロフェッショナルな人たちが平気で言っちゃうような現場もあるわけだから、やっぱり本当に「こういうことがありましたよ」という事実を出していかないといけないですね。「ヒヤリハット」と同時に、これは内閣府だけでなく保険会社とも一緒にやっていければと思うのですが、今まで蓄積されたデータ、保険を実際に何に使っているのか、どういう事故があってそれが拠出されたのかというデータを整理したいですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

この中で出た、保険料の話なんかも併せて調査できたらいいですね。今、ボランティアが入る保険というのも何種類があって、それぞれの中でも、その特約の違いというものもありますし、実際にどの程度加入して、どの程度支払われるのかということもあるし、実際、その保険料の財源をどこが負担して、どういう形でやっているかも、みんなそれぞれ違うので、そういう保険がらみは一遍まとめて整理したいと思います。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

本当にその通り。ただ、こうしたデータの共有は企業にとっては個人情報漏出になるらしくて、なかなか壁が厚いので苦戦しています。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

リスク分析とか、そういう部分に関しては、共同研究か何かの形で出してと。共同でやりましょうと。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

彼らの中にも整理したいと思っていらっしゃる方がいましたよね。多分そのニーズはあると思うんですよ。それはこの検討会でやるか、別の外のグループでやっていくかも考えなければいけない。例えば安全衛生研究会の研究テーマとして実施して、結果を検討会にフィードバックするという方法もある。多分、検討会や分科会の中で作業までする時間はないと思うから。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

三井系の保険、東京都社協をはじめ幾つかのところをやっているところは一応話ができるし、全社協は全社協で話ができるはずだし。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

そうした人々とプロジェクトとしてやっていかないと、多分個々の企業や団体単位ではデータは出さないよとなっちゃう。全社協にお口添えをいただいて保険会社に話すようかな。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

ボランティア保険の場合だと、保険会社が主体のものではなくて、全社協が作った福祉保険サービスとかが主体なので。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

つまりお金を実際に支出している側としてはね、データは出せないらしい。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

要は、全社協がやろう、あるいは、都道府県社協がやろうよとなれば、彼らの場合は保険の運営そのものが目的ではなくて、事故が起こったときの、まさしく万が一のための保険として作ってきているので、起こさないようにリスク軽減のためにやりましょうよという持っていき方なら、引き受けている保険会社の方はあまり利益にはならないかもしれないですけども、保険を作ってやっている側の利益にはなるので、持っていけるかな。共同でやりましょうということで。ボランティアに来る人の事故を減らしましょうということで。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

こういう事例がありました。こういう危険性がありますというのは、やっぱり知ってもらわないと、ヘルメットをかぶる意味すら分からない人たちもいるかもしれないですからね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

事務局を含め5人は、このクロスロードを作ったりとか、もろもろと一緒にやっているの、ある程度普段から議論してるんです。なので、この場にいらっしゃるほかの方、どんどん好きなことを言ってください。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

分からないことは言ってもらって、自分たちも気付いていない部分とか、結構多いです。逆に、それを聞きたいので。例えば、自分で活動されているときに、こういうものがあった方がよかったとか、ほかの人たちに伝えるときに、どういうことを伝えればいいのかとか、そういうことがあれば言っていたら、それで自分たちの論点にもなるので、そういう形で、天寺さんもひとつ現場経験者として、特に人を引き連れていく立場の人ね。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

まず、（引率する）事務局の人間が何を見て危ないと感じられるかというのも、結構必要だと思いますけどね。あとは、個人で行かれる方に対して、どの時点でその情報を伝えるのかという部分が非常に難しいなと私は常々思っていて、すごい熱意のある人に、行ってからという、なかなか。例えば、物資的なヘルメットだとか何とかとなると、個人装備的な部分になる。と—行ってからだとかなり難しい部分もあるので、前もって持っていくという部分は必要になってくるとは思うのですが、タイミングというか、どの時点で伝えるのかという部分を、普段の活動から浸透させていかないと難しいのかなと。そこへやっぱり戻ってきちゃうのかなという。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ありがとうございます。日本の災害ボランティアの脆弱性というのは、今おっしゃったとおり熱意優先でということでしょう。ボランティアには熱意ももちろん必要なんですけど、同時に責任も必要なので、それがどうも抜けちゃっている。熱意や情熱だけで、助けてあげたいという思い込みだけで現場に来ちゃって、でも実際に到着してみたら、「とんでもない、こんな格好じゃ全然駄目だよ」と気づくのが現状なのです、多くは。もちろん、そうでない方たちがだんだん増えてきているのは確かです。熱意をどうしたら具現化できるのかということを、まずご自分の地元で考えて欲しいのです。

先日、天寺さんのところで講演をさせていただいた時にも、ボランティア保険を知っているか皆さんにお伺いしましたよね。で、ある程度災害やボランティアに関する訓練を受けてきた人たちの講演会でも、ボランティア保険を知らないって仰る方が半分以上いらっしゃいました。実際にそんな状況です。「ボランティア保険ってどこでは入れますか。現地で入れますか」と尋ねる方もいらっしゃる。現地でも入れますが、現地で保険に入るということは、その費用を誰が払うかってことを考えなければならぬ。現在は、現地での保険は現地の自治体やボランティアセンターが払っているのです。そうではなくて、「自主的にボランティアに行くのであれば、ボランティア保険ぐらい自分で入っていきましょうよ」という考え方をお伝えしたいのです。

ボランティアの保険の種類は先ほど話がありました通りたくさんあって、一つの震災に特化した保険というのものにはあります。ですから、現地が「来てくれたボランティアを全員入れたい」という希望をすることもある。でも、もっともっと前に自分がボランティアをしようという時点で、一般のボランティア保険を活用して、まずは自分を一步ステップアップさせておくということを、していかなきゃいけないのではないかなと思います。

災害地に行くんだったら、今、どういう状況なんだろう、足元は普通の靴でいいんだろうか、を考える。スカートで来る方も多くいるけど、本当にスカートでいいの？ということを考える。ヘルメットくらいはせめて持っていく。でも、ヘルメットを普段から持っている人はいないわけですね。「え？、そんなものわざわざかぶるの？」という質問もある。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ただ、「それをかぶるの」と思われている時点で、まだあれなのかなというのが、「かぶんなきゃいけない」と思ってくれるぐらいにしておかないと。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

持っていないけど、来て、「かぶってね」と言われたら、「ああ、そうよね」と言ってかぶれるような土壌は必要だと思いますよ。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

例えば、今ので思ったんですけど、うちだけに限らず、ボランティアさんを登録させているところって結構いろいろあると思うんです。そういう事務局が統一的に、「じゃあ、あなた行くのね。行くんだったら、このページは絶対見てから行ってください」というような、確定したホームページなりなんなりがあれば、結構浸透はしやすい部分はあるんじゃないかなと思ったりするんですけど。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

柏崎とかでも、ボランティアに来る前にみたいな紹介ページが出ているわけですし、全社協のホームページにも、ある程度心得みたいなものではないけど、一応、「災害ボランティアについて」というページがありますね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

内閣府も頑張っていますね。情報ヒント集もそうだし、お作法集もそうだし、それを知って入手できるようにすることも大切です。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

ヒント集も対象別にちゃんと分けて、詳細は詳細で大事だけど、よりコンパクトにしないと。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

いろんなところがいろんなふうに出しているじゃないですか。じゃあそれを全部見ていくかということ、ないので、それから全部拾ったいいところ取りの何か。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

あとはやっぱり教科書ですね。要するに、公教育の中でこういったことを教えて、将来のボランティア活動に向けてベースアップしてほしいのですよ、本当に。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

コーディネーター養成とかのところでは、ちゃんと教科書としてきちっとカリキュラムに組めというのはあります。本来は、ボランティアコーディネーターの養成は最低限何十時間とかでするので、その中にはあるはずですよ。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

今、安全衛生の必要性もだんだん取り上げられて来てはいるけれど、じゃあ安全って何なのっていうことの方角性が、少し違っているかもしれない。薄木さんは、どんな装備を持っていったんですか。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

保険の意味で、海外傷害保険に入っていました。でも、その提携している病院というのはヤンゴンにしかないわけです。今回行った村にはないわけですよ。それで、市販の薬を持っていったぐらいでしたね。

当団体の日本人スタッフ1人と、向こうの現地NGOの方、3人で、計5人で行きました。2週間は、村を点々としまして、1日3カ所ぐらいを点々と、車やボートで行きまして、泊まる場所は、被災地の村か、もしくは、仮設住宅に泊まらせてもらいましたね。

目的は、サイクロンで破壊された、例えば、保育施設、孤児院とかですね。そこを今、再建してまして、その進捗状況を確認する。緊急救援ではなくて、モニタリングですね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

直接作業に当たるという活動ではなかったわけですよ。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

そうですね。はい。被災者にインタビューなどをして。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それはまた大切なセクションだし、必要なお仕事ですよ。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

天寺さんは、新潟県中越地震のときにトイレ掃除をして回ったという話を伺っているんですけど、安全衛生で何かとりくまれていましたか。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

安全衛生、活動、それぞれということですかね。基本的な軍手するだとか、寒かったので長袖でしたけど、そういったところですかね。あとは、手洗い、うがいくらいじゃないですかね。その程度しか、特に気を付けてということはなかったです。あと、現地の仮設トイレを回るに当たって、あまり。生理的な部分があるので、早めに切り上げて帰ってくるということくらいしか、特には何もやってなかったと思います。安全衛生ということには、直接は結び付かないと思います。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

あのときは、うがい、手洗いは、ずっと何か騒いでいましたからね。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

そうですね。季節的にも風邪という面でというのもあったと思います。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

復旧工事だといって、例えば普通の人、何が危険だか分かんない人が普通に来たら、普通の人が一生涯懸命復旧工事しているんだという、作業員の人たち頑張っているという写真にやっぱりなっちゃうと思うんですよ。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

ほかのリスクの話をするときにも結構あるんですけど、要は、法律に反するから、あるいは、作業手順指示に反するからいけないと判断する人が結構いて、やっぱり「なぜ」がなくて、規定されていない中でやるんだったら別に問題ない、になる。逆に「工事の写真です」とそういうものを見せて指摘する人は、「これは手順に反しているでしょう。ルールじゃないじゃない」ということでの駄目出しであって、それがリスクだからってという判断じゃない場合もあるじゃないですか。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

特に、例えば、テレビでこうやって、この道何十年のベテランですという人が、ノーヘルで作業したって、みんな、多分、危険だと思わないと思うんですよね。下手すると、そういう人が逆にやっちゃったりとかすると。そうすると、そういうルールのないところで行う活動において、安全だとか、衛生だとか、そういうのに配慮していくというのは、すごく難しい世界だということですよ。ルールがなくても守っていただくためにはどうしたらいいのか、ということを考えなければいけないわけですよ。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それがすごく大切です。けど、もう一つは、来ていただいているという感覚が現地にはあるはず。それも相当大きくて、来ていただいているのに、「必要な装備がなければ駄目です」ということは言えない、「それは危険だからやめてください」といくら言っても、しっかりとした装備をしていない人が幾らでも現場に入ってしまう、その人たちを止められない、というジレンマがあるようです。ですから最近、仕方ないから、現場にヘルメット、グローブをたくさん用意しておいて、何にも持たずに来た人に、「どうぞお使いください」と貸し出しをすることになるのです。でも、それにはお金がかかるわけで、それはおかしいですよ。本来、ボランティアはプライドと責任を持って活動をするものだ、というふうに、ボランティア教育をしてかなきゃいけないと思います。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

考え方がいろいろとあるので。例えば、ボランティアに交通費を出すか出さないか、みたいな話は、一般の、別に災害じゃない場合の話においてありますけれども、あれももとの考え方で、ボランティアをコーディネートしたり、あるいは、来てもらったり、参加してもらおうという観点から言うと、例えば、交通費であったり、そういう装備をそろえたりするお金を出せる人だからやれるのかといったら違う話であって、やれる範囲の中でやる。だから、そういう装備を用意したり、あるいは、そこへ行ったりするお金はないけれど、あるいは頑張りたいという思いがあって、身一つで参加するというのもありなので。そういう思いを持って来てくれる人だったら待ってるよということで、装備を用意しておくというのはおかしいことではない。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

でも、その人が、例えば、第2回目に行ったときも、そう言えば、現地には何でもあるから、自分は持っていないという意識を植え付ける材料にもなりかねませんか。それであれば、そのときに、貸出料100円とか、そういう形で、そこで意識を植え付ける何かツールがあってもいいんじゃないですか。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

別に、あるから持ってなくていいやでも別にいい。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

いいんですか。手軽でボランティア。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

逆に、あるのが当たり前になるっていうのは、正直、安全衛生とは別に、被災地に迷惑を掛けるか、掛けないかというところにも出てくると思うんですよ。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

そこはあるからではなくて、それは別にお金を取るとかではなく、意識付けの問題なので、帰るときに、ほかへ行くときには持って行ってね、あるいは、過去の被災地の中では、道具を持って帰ってもらったところもあります。それは、活動がある程度後半になると、「倉庫に最後、道具が山ほど残るんで、いいよ持って帰って。その代わり、次来るときとか、どっか次行くときには、それをもってきて」という。さあ災害となったときに、みんなが一斉に買いそろえるのは大変というよりも、あんまりそれでみんなに買いそろえられると、現地で調達する物資が困窮するので、「こういうときに必要になるし、普段から買いそろえておいてね」という、それは帰り際の一言だったり、意識付けの話なので、被災地が道具をそろえるのとは別問題じゃないですか。道具をちゃんと買いそろえてこないやつがいけないとかっていうことではなくて。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

道具までいくとなんですけど、長靴とかタオルをいっぱい持っていくということは知っていていい。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

物資という話ではなくて、安全という意味で、自分でちゃんとそういうのはしてきなさいよという議論で。長靴を履いてこいよっていうだけの話ならそれはヒールで来るなよと同じレベルだと思いますけれど。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

でも、それができない人もいるから、現地にもたくさん用意してあるのですよね。長靴に軍手に手袋に水、いくらでも増えていく。最近は特にそういうことが多くなっていますね。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

安易に集められるような状況になってしまったというのものもあるかもしれないですけど、支援があって。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

その辺はだから、バスで連れてくる側にも問題があるとは言いたいけどね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

バスで行くグループに、そのバスに乗る前に、「君たち、持っていないものは全部充分に揃えてバッグに入れて行きなさい」って言ったっていいわけですよ。その時点でね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

だけど、バスを仕立てる側がそういう道具をちゃんと持ってこさせるか、道具を用意しておくなり、バスの方でやれって言いたくはなりませんけれど。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それも、要するにボランティアバスを出すという団体のリスクマネジメントですね。ただのピストン輸送の手段だけではないわけだから、彼らは。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

リスクマネジメントというよりは、そこはバスを出す側の団体の意識の問題。リスクマネジメントでいうなら、「やってることが、被災地の迷惑になるんだ」っていうね。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ボラバスができましたので、現場の話からボランティアセンター、運営側の方と安全衛生、人材育成の話として。以前、安全衛生DVDを作ることのも一つの人材育成、どちらかというとボランティアセンターに近いのかな。もう来ちゃった人たちをどうするかの世界なので、バスに乗っちゃった人たちをどうするかというときに、ある程度、プチガイド的なことを書いているやつを見つけて覚えておいてもらおうというような感じのビデオでした。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

基本的に、衛生は別として、安全に関する教育は日本ではされてないんですよ。心肺蘇生法だって高校に入って初めてやるわけでしょう、日本って。アメリカでもヨーロッパでも、小中高の授業の中に蘇生法が入っています。幼稚園の塗り絵が心臓です。心臓の絵が描いてあって、赤い色と青い色で塗って、自分の体が温かいって言うのはそういうことなんだというのを幼稚園で教えているわけです。手を切ったら血が出てくるんだよということを伝えている。そういう社会と、「生はいいけど死の話はやめておきましょうよ」という国とでは倫理観も違うし、宗教観も違うわけですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

ようやくネットの安全だとかの話を出しているぐらいですから、ましてや、なおさらリスクというよりも、発生確率の少ない災害時の安全とか、どちらかと言うと、まだまだ一般的ではないボランティアをやっている一部の人の安全というのは、どうしても順位は低くなりますよね。というよりも、意識が向かなくなりますよ。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

安全確保をするという感覚ではない。彼らの基本は「安全」なの。「私は安全なんだ」という意識しかない。だから、いざ事故やケガが起こったときに、「何でこんななっちゃったんだよ」「うちの子をどうしてくれるんだよ」ということになってしまいます。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

災害対策そのものもそう。自助、互助、共助といっているけれど、災害対策を考えると、例えば、首都直下地震は起こるよねと。東京都内でも起こるよ、何々市でも起こるよと。でも、自分たちの身に起こるとは思っていない。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

だって、自主防の人たちとか、それこそ地域でやってる災害対策コーディネーターの養成講座とかをやっている、自分がまず最初に被災するということを前提にしないですから。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

自分は、これが起こったときには、誰を助けにいった、どうして、こうするんだと話をするけど、「いやいや、そもそもあんた、大体そのときはどこにいるの？無事？家族は？」と聞いたら、結局ぼろぼろじゃないですか。起こると思って、自分に起こるとは思っていない。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

あと、一つは、自分のところのボランティアさんの話で恐縮なのですが、年代的に見て、大学生とかを見ていると、やっぱり何か現場経験がずいぶん少なくなっているとは思いますが。危険をあんまり体験したことがない、本当にささいなことなんです。軍手しないでまきを持って割るみたいな、そういうこととか、全然やってみないと危ないというのが分からない、想像がつかない。でも、うちは年代が高いので、戦後そういう教育を受けた方々に対しては、ある程度自分のところは、自分は何か基本的な耐えられるようなことはできるという意識を持っている年代層と、そうでない年代層とがいるなと感じます。経験の絶対量はだいぶ違うのかなというふうに思いますね。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ボランティア保険自体が予防ではないですからね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

実際にボランティア保険自体は、もともと事故があって、そのときに普通の保険では保障されない、さあ困ったという例があって作っていったものなので、もともと他の保険とは趣旨が違う。だから、さっき話に出ていたように、あんまりボランティア保険のことを知らないというのも、もともと社協が関

わるボランティア活動の中で保険を作ってきたので、保険というよりも共済に近い形だったのです。だから、一般にPRは、ほとんど一時期までしてなかった。あくまでも社協に登録している団体とか、いろいろなボランティア、地域の福祉活動とかをしている人たち向けにやっていたので、一般的ではない。災害ボランティアがあって保険というものが目に付くようになっただけ。もともと災害特約もなかったのが、必要になるというので、特約を作ったという話なんで。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

天災ABC。例えば、ボランティアセンターでも、1日、2日だったら、ボランティア保険を掛けないんですよ。何をやるかっていうと、イベント保険にしちゃうんですね。そっちの方が安いし、面倒くさくないから。人数でこうやっていって、要するにイベント扱いにしちゃえば、それなりの保険が掛かるっていう。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

日常のもともとボランティア保険が対象にしているような福祉のボランティア活動だと、そんなに大事故があんまりなかった。移送だとか、何だかが入ってくるようになってきて額が上がっていったということがあるけど、あれも施設とか事業者向け保険が、ボランティアとは別にあるんで、ボランティアが移送とかをするという想定でなかった。そういう事故が起こりだしてから後付けで作っていったりしているの。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

では、休憩を10分間取りたいと思います。

・セッション2

「災害ボランティアセンターの運営と安全衛生」

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

健康管理の問題というのは、本当にボランティアの大変な問題だと思います。災害地域における健康管理という問題は、もう一つは、安心・安全の問題とつながらないとなかなかできてこないのではないかと思います。一人ではこの健康や、危機管理というのはできない。災害地、仮設でのもう一つの課題は、孤立の問題というのをみんなで支える仕組みがないと暮らしが成り立たないというところに立っているのかなと、このごろつくづく考えています。この健康管理に対しての問題は、健康と安心と安全という問題が繋がらないと、危機管理になりにくいのかなと思っています。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

ありがとうございます。休憩に入る前に課題の整理、意見交換ということで、現場での活動と安全衛生というような話をしました、なぜ浸透しないのかと。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

補足ですが、私たちがこの分科会でやっているのは、地域の安全や健康を支えるために、ボランティアたちがたくさん投入されている、そのボランティアさんたちが安全に活動できるようにしなければ困るわけですね。その辺に特化して、防災ボランティアの安全衛生をどのように担保していくかというような検討をしております。ぜひ先生にアドバイスをいただければと思っています。お手元の資料もこの会の中で作ってきました。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

この会で、一番動いていらっしゃる会とは聞いていますけれども。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

前回、現場での活動と安全性という形で、意見交換等を行いまして、現場になぜ浸透しないのかとか、そういう形で、参加される方に、リスクとか、なぜ必要なのかというのがなかなか伝えられていないのではないかと。その辺の話をして、「ヒヤリハット」集ではないですが、実際にその「ヒヤリハット」で周知することが必要なのではないかなというように話をしました。

一つ置いて、今、休憩を取って、次は、災害ボランティアセンターの運営の中で、これから話すのは、運営の中で、安全衛生という位置付けというのでしょうか、そういう話をできればと思うんですけど。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

せっかくなので、災害のボランティアの話はしましたけど、通常の、もともとのボランティアの安全衛生、安全教育みたいなものの現状とかはどうなんですか。災害ボランティアのという話をしたときに、そもそもボランティアの安全衛生の話であったり、あるいはボラセンでのそういう教育、あるいはコーディネーターに対する教育もですけども、ないよねという話があって。そもそもの教育がない状態で、災害時ってこんなに危険なんだよという話だけでも伝わりにくいということもありまして、現状、今、どうなっているのでしょうか。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

でも、携帯トイレなんて誰も持って来ていないような気がするのですが、いかがでしょうか。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

ボランティア活動を行うにあたって、現地の状況、季節、場所、発災の時間帯などを前提にして、健康管理・安心・安全に関するマニュアルを作成する必要がありますね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

先生のお話の中で、健康管理というのがあるのですが、今までそこも込みで安全衛生の話をしている

けれども、やっぱり健康管理と整理もした方がいいのかもしれないですね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

もともと私が安全衛生の活動を始めたころは、安全管理をしたかったんですね。ですから、「衛生」という言葉はついていなかったのです。とにかくケガをしないこと、熱中症にならないこと、その部分をメインにしていたのですが、その後、やはり衛生や健康管理もしないといけないと思い、現在のタイトルは安全衛生としています。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

そうなんですね。安全と衛生と健康は、つながりがあるんですね。それぞれを整理して情報提供しながら、みんなでより使い易い物を作成する試行錯誤をして積みあげていき研修プログラムを作成したいですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

多分、センターで今やっているのは「健康管理」。だから体調を悪いときはどうするのとか、暑かったり、寒かったり、あるいはインフルエンザなどを避難所へ行ってうつさないようにというのは「健康管理」なんですね、整理の仕方と言うと。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

安心、安全、衛生、健康かもしれないですね。その安全の方については、本当に最低限のことしか言っていないと思うんですね。とにかく現地に早く着こうということをみんな考えてしまうので。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

安全、安心、衛生、健康。少し整理してみるのもいいのかもしれないですね。何か全部セット、それが一つのものだと思っていたけれど。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

別なのでしょうね。更に、衛生や健康と安心はまた別なのかもしれないですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

一緒に全部引くくめて考えていたけど、ちゃんと現場の人と話すときとか、ツールにして配っていくときには、少し整理をした方が。今、センターの人と話して、「いや、最低限のことはやっていますよ」というのは、それは多分「健康管理」はちゃんとやっているということなのかもしれないですね。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

現地に入るときに、昨日、栗田さんが栗駒から帰ってきたと思うんですけども、ボランティアセンターを立ち上げるか、立ち上げないかという議論が、幾つかあると思います。現地の方々によって、よそから人が入ってくることに對して、意識が違うと思います。現在、災害が起きている場所というのは、非常に山間地域ですね。くらしの文化、生活の仕方、人との付き合い方、コミュニケーションなどそれぞれ特徴がある。ドアの開け方が全く違いますよね。そのときに、安心・安全ということが両者、あるいは、現地の方にご理解をいただかないと、全くドアが開かないということがある。そのところを無理してしまうと、お互いに、いろんな葛藤になってしまったりということがあって、衛生だけの問題ではなくて、心を傷つけてしまう。そこは、ものすごく後で大きな課題になっていきますね。だから、安心と安全というのは、相手とのコミュニケーションの仕方とか、心の問題とか、物理的な安全だけではない。そこをどう考えるかというのも一つですね。だから、いつも、入り方といいますか、そこで活動を始めるときの始め方とかというところで、最初の注意をしないで、善意だからとか、かわいそうだからとか、何かしてあげることはあるかしら、みたいな感じで入っていくと、相手に大変な負担と、傷つけてしまうっていうのですかね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

言い方を良くすると情熱であったり善意であったりするのですよね。その気持ちが先に立ってしまって、準備もせずに現地に入ってしまう。相手となる被災者が見えてない。ボランティア活動は自由だという表現は、被災地の状況はどうなのかということまで含めて考えていかないといけない。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

来た方々が一人、二人じゃなく、半端ない数の方々が入ってくることになるので、そういうことを安全衛生で考えていくと、入り方とかまでかかわってきくこともあると思います。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

作業をどんな規模で、手順でするかということで、それを皆さんに分かりやすく理解してもらおうとしているんです。でも、「安全衛生プチガイド」は安全というより健康管理の冊子かもしれませんね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

衛生の中に健康がもちろん入ってくるんで。あと、ちょうど、今、ホームページに挙がっているヒント集。確認したんですけど、結局、服装の話と、夜は迷惑になるから騒がない、あるいは、夜更かししたら次の日の活動に支障をきたすなど、やっぱりあらためて言われて見ると、健康管理のことだったりします。ここも、危険な場所での重労働があるから、「安全管理には」と書いてあるけど、よく読むと、健康管理だ。言われると、そうか、これは健康管理かなと。「個人装備の例」と書いてあるけれど、これもただ挙がっているだけなんで、ほとんど、「遠足の持ち物は」というのと変わらないかも。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

遠足のしおり状態ですね。時間も限られているので進めさせていただくのですが、一応、ボランティアセンター運営の中での安全衛生に対する課題という中で、柏崎の方へ聞き取りに行ったときは、最初はなかなかそんなところまで手が回りませんよとか、気が回らないとか、人がいないとかというのがあったんですけど、例えば、最初は、安全衛生、多分、頭の片隅では必要だと分かっていたとしても、最近いろいろ騒いでいるので話が出たとしても、やっぱり最初は気が回らないとか、人手が足りないとかというのが実情なんですよ。仕組み作りになるかもしれないんですけど。例えば、ボランティアがどっと来たときに、何でだろうと思ったこととかあれば。結構、いろいろと張り紙とかもしてくれているんですよ。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

そうですね。先ほど、蓮本さんが休憩前におっしゃっていた内容に、結構もう集約されるのかなとも思うんですけど、コーディネーターの人間がそれをどこまできちんと理解しているかという部分とか、そういう意識をどこまで浸透させていくかというのは、究極的には人材育成にかかってくるのかなというところなんですかね。ボランティアセンターでどれだけPRできるかというのは、さっきも出たボラバスの問題も含めて、事前にどれだけこういう、今、成果物として挙がっているものを入れていけるかというところじゃないですかね。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

事例として、例えば、各グループで分けて送り出したときに、理想としては、そのグループの中に一人安全衛生担当がいる、作業現場で、現場リーダーの中に安全衛生の担当がいれば、多分、理想なのかもしれないけれども、実際、じゃあ普通、みんな寄り集めてきた人たちの中で、安全衛生の担当をやってくださいと言われて、その人ができるのかということもあるし、我慢できるのかということも。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

実際に活動せずに、そういうことに気を配ることができるかという。ボランティアに来る人は、現場で体を動かしたいだろう。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

みんな、やりたいって来るから、それこそ水害で来れば泥かきをしたい。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

でも、水害のときに、長野の下諏訪の方に行きましたけど、少なくとも行った先では、じゃあ、30分単位で10分の休憩を取りましょうという中で、みんながそれぞれ時間を気にしながら作業していたというのもあったので、私の少ない経験から言うと、下諏訪の中では、だいぶそういう時間を取って活動するように気を付けてきたんだなあという思いはしたんですけど。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

諏訪のときは、確か日赤が救護所を出してたんです、ボランティアのための、ボランティアセンターの中に。目の前が日赤病院だったというのもあるんですけど。あそこは、無線隊の人たちが現場を回って、一応ボランティアの方も見てた。見回りをしてて、というのがあったんで、やっぱりそういうところがほんと手伝いに入ってくれた方が、ボラセン的には、任せちゃえばいいだけですから、そういう医療的な人たちが入ってくればというのが。柏崎のときにも、誰か看護師さんとか、そういう人がボランティアで来てくれればお任せできるみたいな。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

柏崎は確かりレーでもって、保健師さんのグループがずっと入っていましたよね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

黒田さんは、黒田さんの目線が入ってくださったんですけど、彼らもほとんどが被災者に向いていたのは確かです。センターで直接お会いして、せっかくセンターの中に席を設けていらっしゃるのだから、センターの中、つまりボランティアの衛生や健康にも目を向けてとお願いをしました。その後、別の看護師さん、子の方は日赤や医師会からではなくて個人で登録して来られた看護師さんですが、彼女たちにボランティアの結構チェックをお願いをして、ちょっとセンターに滞在してもらったりもしました。やはり災害ですからね、当然、彼女たちも被災者のために何かがしたいというお気持ちで来られるんですけど、組織的にボランティアのための健康管理、安全管理っていうものも立ち上げていかなければいけないかなと考えています。いかがでしょうか、その辺は。先生にいろいろアドバイスをもらいながら組織化もしていきたいと思います。

薄木（シャンティ国際ボランティア会）

この質問の答えには直接つながらないかもしれませんが、やっぱり私は個人の意識づくりが重要だと思うんですけども。先ほどもお話にあったように、日本人というのは本当に自分のときにならないと分からないと思うんですよ。例えば、危機感がない、今週、北朝鮮からミサイルが発射されるのですが、危機感は全くないですよ、日本人は。そういった教育をしていくべきだと思うんですけども。例えば、車の教習所で免許を取るときに、本当に事故現場の写真をいっぱい見せられますよね。ものすごい死体の映像とか。それでもう、シートベルトをしなきゃいけないと思うと思うんですよ。事前に何かといってもあんまり難しいと思います。だから、普段から本当に教育していくべきだと思います。

渡邊（株式会社ダイナックス都市環境研究所研究員）

先ほど、衛生のコーディネーターがあった方がいいというお話をされましたが、この方々というのはいつ入るのかという問題を一つ聞きたいと思います。役場は対応できないとか、ボランティアセンターで対応できないというのはよく分かって、自分がいた町も人口1万5000人、市町村の職員をしてみました。社協の職員も2~3人ぐらいしかいないので、そのレベルで、その人たちがボランティアを受け付けたとしても、対応をそこまでできるかといわれると、多分できないですよ。そういうのが分かるので、例えば、コーディネーターの方は、県のレベルに入るのか、市町村のレベルに入るのか、それとも、グ

ループのレベルでちょっといたらいいということで、いろんな層があると思うんですけども、どのあたりを対象にしているのかなというところを知りたいと思います。

藤田（ＮＰＯ法人千葉レスキューサポートバイク）

ボランティアセンターって、主にどこでも最近では社協がメインでというのがあって、まずそういう意識付けで、できれば社協さんの方でやってもらえれば、意識だけ、取りあえず心の片隅だけでもいいんで、持っておいてもらえれば、必要だと思ったならば、それを「できます」といった人が来たときに、すぐ動けるのかなというのもあるし。あと、中之島の水害のときにやったのは、日赤のバイク隊が入って、ボランティアの見回りとかを買って出てきたということもある。例えば、それであれば、日赤さんみたいに全国的な組織で応援が来るようなところに、先にある程度意識を持っていれば、そういう既存の団体、ボランティア団体というのは大きな団体ですから、そういうところが、そういうところをある程度担えるようなぐらいになっていけば、それも楽というか、すぐ動けるのかなということは、個人的には思っているんですけど。何も知らない、例えば、いきなり「安全衛生が必要です」と言ったときに、向こうはもうそれどころじゃなくてパニックしているときに、最初にセンターを運営している側の方で受け入れてもらえないとどうにもならないし、じゃあ勝手にやってくださいみたいになっても困っちゃうというのもある。例えば、それこそ普段から救急法などをやっているようなところ、日赤みたいなところがあれば、ある程度そういうものも必要だということを、人材育成になるかもしれないんですけど、例えば一つの奉仕団がぼんと来てもらえれば、そこで多分助かると思うんですよね。

渡邊（株式会社ダイナックス都市環境研究所研究員）

日赤は、ちなみに、ボランティア関係の衛生管理というのは、あまり力を入れているとか、そういうわけではないのですか。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

奉仕団と医療班は組織も入り方も違いますね。日赤の医療グループ災害があるとすぐに現地に入ります。当然被災者のためにです。被災者のために医療をしている。それとは別に、奉仕団のグループというものもあると思いますが、その人たちも実は被災者向けですよ。

藤田（ＮＰＯ法人千葉レスキューサポートバイク）

基本的には、被災者向けの奉仕団というのは、ボランティアなんです。日赤の場合はもう１グループがあるんですね、普通の防災ボランティアというグループが。奉仕団じゃなくて、主に駆け付け方といわれている防災ボランティアというグループがあって、３系統あるんですよ、日赤さんが動くときには。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

指揮系統もみんなそれぞれ違うからね。

渡邊（株式会社ダイナックス都市環境研究所研究員）

最初の話にまた戻らせていただくと、衛生のコーディネーターというと、大体どのレベルを対象としている。市町村とか、県とか。例えば、災害ボランティアセンターでも、出張所みたいな感じであるかと思いますが、そのレベルまで人が入るような感じだったら、日赤や外部資源も衛生コーディネーターというような人になっていくといいのかなという感じはします。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

さきほど、「安全衛生コーディネーター」という名前がよろしくないのではないかと、とのご意見がありました。ボランティアセンターを立ち上げるときに、コーディネーターであるかどうかには関わらず、安全担当という職務があってもいいと思うのです。その職務担当者は、もちろんそれだけをやっているわけではなく、色んな仕事をしますが、こと安全に関してはその人がまとめ役だよというような役職でいいのです。安全衛生コーディネーターを養成して、その人たちが各地に行くことにしたら、全国の全ての被災地に行かなきゃいけなくなるし、東京都で首都直下型があったり、東南海地震になった時にはとても対応しきれません。どれだけのコーディネーターが必要なんだということになっちゃいますよね。ですから、そういう意味ではなく、安全衛生を常に考える職種が必要であるということなのです。ただ、どうしても安全と活動は切り離せないものなので、その必要性をちゃんと理解し、全体を見渡すことのできる仕組み、ボランティアの安全や衛生のコーディネーションができるようなシステムを作りたい。もし私や保健師、看護師が安全衛生コーディネーターを名乗って視察に行っても「誰、あんた？」という反応ではなくウェルカムで出迎えてほしい。安全衛生というポジションが必要であるという認識を、基本的に自治体にはぜひ持ってほしいです。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

だから、この「目からウロコ」というのは、実際に作業する人向けなのですね。例えば、これを分けるとしたら、例えば、これは現場リーダー向けの「ウロコ」も必要になれば、ボランティアセンターの運営向けの「ウロコ」も必要になってくる、全部引くくめちゃうとぐちゃぐちゃになっちゃうんで、例えば、現場リーダーであれば、これのほかに何をというのがあれば、それで負担が多分減ってくるのではないかと。例えば、ボランティアセンターの運営で、こういう「ウロコ」で簡潔に、初めてボランティアセンターに昨日配属されたばかりなのという人でも、見れば何となく必要性が分かるようなものがあれば、それなりに安全は確保される。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

これは中越沖地震以降、災害が発生するたびに現地で配布させていただいているんです。中越沖地震でも全員に渡していただいているし、去年の水害時には、一人一人に全部お渡ししていただいている、そういう協力を各地のボラセンがしてくださっているのがあります。そして、もらった人はやっぱり見ますよね。少しでも安全衛生について考えてくれるチャンスになるとよいと思います。また、同時に「ウロコ」のかなり大きい拡大版を作って、センター内に張り出したんです。そうすると、朝、ボランティア・ミーティングを必ずやりますよね。そのミーティングに便利なツールとなるのです。これが張ってあれば、つい話したくなるじゃないですか。そんなふうに上手くご利用いただいて、少しでも

全体のレベルアップがされてくる。現地に集まった人たちに対する教育になるわけですね。本当はもう少し手前で、現地に入る前の人たち、あるいは全く普通の社会生活を営んでいる中で、ボランティアのノウハウと言わずに、「安全衛生って何？」っていう教育をしていかなきゃいけないかなと思うのです。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

現状としては、個別の人材育成の前に、取りあえず災害が起きたときに集まってしまうので、じゃあ来てくれた人たちをどうするのかと、とにかく安全に活動してもらうためにはといたら、もう現場でやるしかないというので、その現場の盾になるのが、ボランティアセンターということが、大体みんな、特に個人の人たちは、ボランティアセンターに登録して、そこでマッチングを受けて活動しに行く。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

ボランティアコーディネーターは、人ではなく、おっしゃるように機能なんですよ。だから、その機能を、例えば、柏崎にしても、どこにしても、当初からそのボランティアセンターが災害の最前線になると思っていないんですよ。それから、自分たちの災害ボランティアセンターを立ち上げるとも思っていないし、自分から災害ボランティアコーディネーターになるとも思っていないわけですよ。だから、「災害ボランティアコーディネーターを育成する」の前に、しなくちゃならないのは、今おっしゃったように、安心とか、安全とか、衛生とかというような、いわゆる啓発といいますか、災害が起きたときの、私は「危機管理」と言っているんですけども、一つはその危機管理をどうするかということの研修プログラムは絶えずやりながら、お互いに研修の基盤をつくっていくということをやっていかなきゃいけない。

それから、もう一つは、コーディネーター機能を学習するというものの中に、この安心・安全ということをやっていく。それと、ネットワーク。この三つのことができないと、安心とか、安全とか、衛生管理とかということにならないんじゃないかなと。

天候、気候、気象、一人ひとりの体調、作業の手順、被災地のこと、ここに書いてあるこれを、やっぱりしっかりと定着させるということが大切ではないかと思います。大変なことだけでもやらないといけない。全く知らないいろんな人が現地へ、予定外の人も、予定内の人も参加される。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

しかも、情熱だけは豊富という人が多い。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

現地には、聴覚・視覚・言語障害の方もおいでになる。車いすの方もいらっしゃるし。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

高血圧の方も数多くいらっしゃいます。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

薬もなくなるし、難病の方もいらっしゃるっていう状況ですからね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

また、外から現地に赴く人たちだけがボランティアなのではなく、中で被災されている方たちの中にも昼間は時間があるからボランティアしましょうと仰る方たちもたくさんいるわけですよ。我が家はぐちゃぐちゃなんだけれども、おばあちゃんが大変だから、お手伝いしなくっちゃとお母さん部隊ができたりするのです。そうすると被災地の中で、気持ちとしてはかなり抵抗があるんだけど、でもやってあげようという気持ちで、色んな作業をしていらっしゃる方の心の健康管理っていうのも大切になります。また、ちょっと疲れてくれば、すぐにケガにつながったり、気がつかないでヤケドをしちゃったりということも起こっています。状況はだいぶ幅広くなってきてしまっている。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

例えば、安全衛生を一つで考えると、本当に狭くなってしまうということもあるし、先ほどの「ヒヤリハット」で言えば、分科会の中に、昔だったら1日前プロジェクトがあって、そこでも「ヒヤリハット」とかが集まってくるわけじゃないですか。そういうところにも絡んでくるし、人材育成とかも絡んでくるし。あと、例えば、さっきのじゃあ誰かを応援しようとする、もう広域応援になっちゃうわけですね。広域支援ということが出てくるわけですね。意外とどこにでも顔を出せる部会なのかなとも思うんですけど、安全衛生自体が。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

安全衛生は本当に様々な活動を串刺しにしている、むしろ全ての活動のベースなわけですよ。で、活動は活動なんですけど、理屈という面からもちろんと検証をしておかなきゃいけないから、検討会や分科会、部会があるわけですね。一般社会での教育もぜひしていきたいのですが、災害ボランティアセンターの活動に特化したときに何が必要か。それはそれできちんと組み立てていって、提案して行くことが必要。各自治体やボランティアセンターが採用するかはわかりませんが、ぜひ採用していただけるような形に持っていきたいですね。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

提案というか、課題の中で、こういう整理をして、それを読んでくれた人たちがどう動くのかということもあるし、例えば、そこに災害ボランティアセンターを特化したとすれば、対象が結構分かりやすい、取りあえず社協職員みたいな。であれば、取りあえず取っ掛かりはしやすいのかなと自分的には思っています。さっき言った全社協の研修会に1コマ入れてもらうから始めて。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

さっき山崎先生が、「社協の人たちは災害の最前線に立つとは思っていない」というのがちょっとショ

ックだったんですけど。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

研修や協定は始まっていますよ。さっきおっしゃった全社協のプログラムも各地で実施していますし、それから、各県社協が協定を始めましたし、市町村協定も始まっていますし、そういう一般的な研修はしているんですけども、自分がその土壇場に立ったときに、自分になるんだって日ごろからいつも、日常的に思っているかということ、そういうわけではない。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

それはもう、社協さんの職員に限らずに、日本人は皆さん自分が被災するとは思っていないのと一緒だと思うんですけども。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

社協というのは、何か有事があったときに、現地ボランティアセンターの担い手になるという意識がないのですか。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

いまだに災害地にボランティアセンターをやるのも否定する方がいますからね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

それがあったのでマニュアルをつくらざるを得なかった。関連することなのでこの場で言いますが、一般のボランティアの安全も含めて社会教育なので、一つボランティアセンターに関して言うと、さまざまなスキルの教育というのは必要なんですが、やっぱりパッケージの中に安全衛生が盛り込まれている必要がある。災害ボランティアセンターの設立、運営のマニュアル化ができていたり、あるいは、そういうデフォルトになるようなものとかがある中に、きちんとこういうものを入れていく。例えば、今、普通に運動会やイベントをすると、看護師さん、医師が必ずいたり、あるいは、救護所を設けたりします。災害時のボラセンも、被災者対応ではなくて、来た人たちの救護所なり、あるいは、そういうための常駐するような看護師がいたりとかというのは、デフォルトなんだよというような仕組み。これはだから、いい悪いとか、あるいは、担当者が新人だからそういうところまで気が付く、気が付かないではなくて、「必ずするの」というね。そういう何かデフォルトになっているようなものというのはきちんと作って、そういうものを全国的に発信していってもらおうというのは、一つ必要になってくる。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それを私も午前中に言いたかった。内閣府としてというのでなくともいいのですけれど。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

だから、内閣府というよりは、例えば、災害ボラセンに関して言えば、全社協とか、あるいは日赤もそうだろうし、あるいは震つな（震災がつなぐ全国ネットワーク）とかというような、災害のNPOでやっているようなところは、最低限こういうものは要るものですよと。みんなが災害の現地に来れば、ある程度共通のものとして、これ要るよねというか、もういい悪いじゃなくて作らなきゃと。ちゃんと、何かあった時のためには、やっぱりそういう人にいてもらわなきゃと。そういう認識があれば、例えば、地元の人、あるいは、地元の人では手いっぱいだったら、応援に来た医師会や看護師会の人に、一人常駐してという話もできるしいてもらえれば、健康管理とかもろもろに関してはお任せっていうこともできる。連携を取るなどというようにしても、まずそういう人がいるかどうか分からないと声も掛けられない、というところがあるので、「要るんです、誰かお願いしてくださいね」となれば、それは現場で最前線に立つ人間は必死に探します。「置かなきゃいけない、頼まなきゃいけないんだけど、誰かいない？」と。というのが一つ。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

そこまでのことが本当に提案できれば、われわれとしては非常に大成功なんです。ただ、これまでの活動の中では、自分自身、そこまでやれるかなという意識もあったわけです。今までだって必須だったはずですが、ここで改めて「整理します」と言いたいです。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

「ヒヤリハット」だったり、いろんなことを整理していく中で、最低限これは置いて置かなきゃいけない、やっとなきゃいけないという中にそういうものは入れておく。そして、プラス、あった方がいいかなとか、あるいは作業中のことであったり、もろもろの安全衛生、あるいは現地でやるときの天候との問題であったりというのは、そこから少し越えることなので、そこがコーディネーターとかのスキル、教育になってくると。それこそなぜ危ないのか。どういう状況だとリスク、危険の発生する可能性があるのかというのをきちんと、そこは教育をすると。デフォルトでやんなきゃいけないと決めて全国どこでもやるもんですよとなっているのと、プラス、教育のと。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

仰る通りですが、実現するのは大変なことなのです。だから、おりあるごとに、記録係は絶対に必要、安全衛生担当は絶対に必要と言ってきたのです。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

安全衛生担当というのは、その辺、若干受け入れにくいというか。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

そうですね。だから、機能という意味で入っていけるとよい。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

違和感を感じるのは、担当だと個人になっちゃう、だから機能なんだけど。災害ボランティアセンターというものの中には、安全に関するこういうことはやっておかなきゃいけない、その機能がなければセンターとしては最低限のものを満たしてないんだという形にしていけないと。担当みたいに人を置けばいいかというものではないと思う。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

その通りなのですが、またそういうふうに言うと、「ちゃんとやっていますよ」と仰るセンターも多いのですよ。だから、どうアプローチするか難しいのですよね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

でも、センターの機能とかというときには、例えば、トップになる人にも言って、その安全管理に関する責任というのは持ってもらわなきゃいけないし、考えてもらわなきゃいけない。それぞれの現場のコーディネーターもそう。それぞれ安全管理に関する意識なり、それぞれに配慮しなきゃいけない。担当が一人いて何かすればいい、あるいは、コーディネーターがそれを知っていて全部に目を配るではなくて、それぞれのポジションで気を配らなければいけないリスクがあるので、そういう教育はまた別にしていかないといけない。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

それを具体的にどうするのということを、今、検討しているのです。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

災害ボランティアセンターに関して言えば、社協と災害系のNPOというところから始める。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

参加者全員というのは、まず不可能に近いですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

例えば、震つな系であれば、現地へ飛んでいく人たち、最初に行く人たち。だから、この辺は逆に教育がなくてもある程度共通認識さえできればいいのかなというのはありますけれども、社協の方であれば、各市町村社協の研修、あるいは、災害の研修ではなくて、普通のボラセンの担当職員の研修会であったり、会議のときに、そういう話を。そのときも、無理に災害と言わなくても、日常のボランティア活動の中での健康管理以外の部分というのももっと配慮しなきゃいけないと。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

仕組みの問題と構成要素の問題と研修の問題とあると思うんですよね。そうすると、仕組みの問題として、ちょっと古い話なんですけど、三宅島の場合には、ガスが出ているのです。しかも、有毒ガスなんです。昨日、おととい、やっと阿古地区という一番大きなところのガスは安全の範囲に入ったんですけども、坪田地区というところはまだ有毒ガスといわれて、ボランティアがあそこに立ち上がって入ったときは、ガスが出ているので、研修を受けて、このマスクを持っていない人は島の中には入れないと決めたのです。そういうふうに、災害時って、非常に自分の身の危険が迫って、しかも、クリーンハウスは限界がありますから、自分で自分の身を守らなきゃいけないということはあるんですよね。その辺の災害特有の危機状態があるというときは、仕組みとしては、先にその情報を出してもらわないと困るんですよね。石がどんどん落下するところにボランティアが入ってしまうと、道路が閉鎖されたらその人たちは帰れないということが起こりましたよね。そういうこともあるし、水が全く出ないということもあるので、災害固有の衛生とか、健康を守られないことについては、絶対に情報を出してもらわないといけないと思います。命を第一に考えなきゃいけないので、仕組みの問題、ボランティアセンターの構成要素の中に位置付けるということと、研修の問題。あるいは、情報の中に衛生とか、安全とかということは必ず入れるとか、そういうこっちょも少し項目を立てていう必要があるかもしれませんね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ありがとうございます。先生の仰るようなことを私たちはずっとやってきたのですが、それをズバっと後押しをしてくださる、山崎先生のような方がなかなかいらっしゃらなくてですね。

・セッション3

「安全衛生と人材育成」

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

すみません。あと5分になってしまっ。ざっといって、人材育成というところまでも今、少し話が、教育ということで出ているんですけども、振り返りまとめの前に人材育成が中途半端になってしまったので。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

最後はやっぱり、仕組み、構成要素、教育と、そこら辺でまとめていただければ良いのだと思います。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

というよりこれから、そういうものに整理をして、きちんと提案、提示していくような形でこれからやらなきゃね。われわれの中では分かっているんだけど、人に見せるときにそういう見せ方をしないと、やっぱりなかなか進まない。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

ボランティアとして入るときに必要な条件として、「衛生の問題というのは第一優先順位です」というぐらいに言ってしまうかですね。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

あとは、ニーズ調査をするに当たって電話だけで取り次いでいる調査ではなくて、現地をしっかりと見ていかないと本当の危険が分からないという部分も、実施してきた人たちの声として届いていて、本日も色々なことをたくさん話して来たんですけど、山崎先生を迎え、問題点がきちっと整理されたと思います。本当に、我々の今やっていることが現場で具現化していないんですよね。ですから、プログラムを作成して、県社協などのプログラムに入れてほしいと思い、1時間位のプログラムを作理始めています。そして、コーディネーターという人間が必要だと言ったつもりはもともとはなかったし、そういった職務というかセクションが必要だということを主張してきたのです。

コーディネーターという、本当に人と、人間と言っていたつもりももともとはなかったし、ただ、やっぱりそういったセクションが必要だということは言ってきたわけですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

必須要件としてこういうものは必要ですよ。人がついたらできるというものでもないし、その一人一人が意識をするものでもないの。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

だから、研修の中のプログラムをという中で、例えば、今、岡野谷さんが言った、推進委員会の方の講習の中にプログラム化を、最近。

天寺（災害救援ボランティア推進委員会）

そうですね。最近、岡野谷先生がされていますけれど、それを訓練の時点でも入れていくように、何かパッケージがあると、こちらとしてもやりやすい。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

現地で作る側と、応援に行く側と、現地の地元の人がボランティアとして活動する側の、それぞれのパッケージが若干変わっていないと。センターを作る側と応援に行く人と、地元の人に参加する場合は、配慮すべきことも違うような気がします。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

活動だけではなくて、逆に、ボラセンというか、受け入れ側のパッケージも作らないと。

藤田（ＮＰＯ法人千葉レスキューサポートバイク）

参加する側は頑張ってもらっているんで、例えば、去年 12 月に、千葉県社協でやったのは、市町村社協職員に対してのボランティアセンターコーディネーター講習会のようなものをやったときに、1 コマ、半日、安全衛生をやらせてもらったのです。その中で、一応、ボラセンの中でこういう安全衛生、写真とかを見せたり、柏崎へ行ったときの話とかをして、そういうけが人が出ているとかという話をして、そういう形でクロスロードを作っているんですけど、部会の方で。そういうものを取り入れながら、そういう形で、一応、参加してくれた社協さんの中では、ちょうど社協さんの方でもこういうマニュアル作りがはやっていたらしくて、そのマニュアルの中に、一つの部署を入れておくだけでも違うという。個人的にはマニュアルってあまり好きではないのですが、でも、マニュアルを作っているところには、ニーズ班とか、その辺の下に、小さくてもいいから、安全衛生の班、担当みたいに入れてもらうだけでも違うのかなという。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

事前に作ってあるマニュアルに書いてないことは、緊急時の場合はやれないから、現実、なかなか動かせない。

藤田（ＮＰＯ法人千葉レスキューサポートバイク）

特に市町村によっては、もともと市町村の社協さんの中に看護師さんがいたりとかするところもあるにはあるので、ケアサービスもというようなところとか、やっぱりそういうところであれば、向こうのみ込みやすいところもあるんですけど、さっき言ったみたいに、2～3 人しか社協職員がいないようなところだと、社協職員の数より班の数の方が多いみたいなの。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

そもそもが、災害ボランティアセンターは、昔、全社協で市町村もやらなきゃいけないですよと行ったときは、防災のことは福祉の部局の話じゃないからという意識があったので、社協もやらなきゃ、やらなきゃ、やらなきゃと強く言っただけで、ここまでいろんな人が出てきてやるようになったら、もうちょっと身を引いてもいいかなと思います。逆に、災害ボラセンばかりになって、本来の要援護者の対応であったり、あるいは、福祉施設とかのフォローが全然できていない、災害ボラセンのために主だった職員がほとんど取られてしまってほかのことができないような被災地もある。これだけ ＮＰＯも含めてボランティアが駆け付けてくれるなら、場所も物もお金も提供するからやってもらえば、何人が現場と地元とのつなぎ役は要りますけど、それでいいんじゃないのかなと思います。

振り返り・まとめ

藤田（ＮＰＯ法人千葉レスキューサポートバイク）

最初、言った中で、現場での活動と安全性という中で言うと、もうちょっと「ヒヤリハット」集とか、なぜ必要なのかということを周知する必要があるのではないかなという形ですよね。もし事故があった場合は、現場はどうなのかというのをどんどん知ってもらわないと、いきなりヘルメットが必要だとか、

そういうことを言ったとしても、なかなか受け入れられないのではないかと。あと、もっと細かい、普段からのボランティア活動とか、そうすると、社会教育の話になってしまうので、その辺は置いておいて、そういう形が課題として出てきていると。

後半は、先生にいろいろお話ししていただいて、先生の言葉をそのまま使っちゃえばいいのかなとも思っているんですけど、安全衛生の担当部署というか、担当のところに必要性の認識をどんどん持ってもらわなきゃいけないと。人じゃなくて、ボラセンの一つの機能としてということで、仕組みの問題、構成の問題、教育の問題という形の中で出てくると。あとは、そういう形で研修の中にも一つのプログラムとか、そういうパッケージとかも考えていかなきゃいけない。考えてというか、提案できるような形で、今後、進めていけばいいんじゃないかという形なんですけど、どうですか。何か追加、抜けているところがあれば。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

仕組みと構成要素と教育と三つそれぞれ作っていかなくちゃね、整理していかなくちゃねということ。来年度やるんだったら、またその方向でいきましょうと。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

では、来年度の計画を立てましょうか。安全衛生研究会には新しい方も少しずつ入ってくれています。毎月27日が定例会です。ぜひ多くの人参加を戴ければ嬉しいと思います。最後に、山崎先生、何かアドバイスをいただければ嬉しいのですが。

山崎（神奈川県立保健福祉大学学長/東京ボランティア・市民活動センター 所長）

この「安全衛生」のところが一番頑張っているという話は聞いていたので、今日、聞かせていただき本当にありがとうございました。まず、一番先に出てくるのは、やっぱり命の問題。命の問題に一番近いところにあるのが、安全とか、衛生とか、健康。まず、最初に汚物の問題から始まって、それから、ゴミの問題から、もう待たなして出てくるので、これは必ず入れてくださいということを、この部会としては言った方がいいと思うんですよね。one of them じゃなくて、「必須領域です」と言った方がいいと思います。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

ありがとうございます。その位の提言をしっかりとっていただいたということですね。

蓮本（特定非営利活動法人災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード 理事）

肉付けと精査のときはぜひ。それと、クロスロードもいろいろと作っていますので、ぜひまたご指摘を。

藤田（内閣府 政策統括官付参事官（災害予防担当）付主査）

部会にも参加させていただいている個人として、ぜひ安全衛生コーディネーターというのか、その中身ですね。中身を詰めるという作業が今後必要なのかなと感じました。

岡野谷（特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表）

一番肝心なところですね。簡単な概要版と、コーディネーター用のカリキュラムのテキスト。時間がかかりますが実現していきましょう。

藤田（NPO法人千葉レスキューサポートバイク）

それでは時間ですので全体会会場に移動をお願いします。